

本尊とは何か

廣 田 頼 道

一、はじめに

私達が信心修行をしていく時、本尊とは大切な存在であります。

ならば、本尊とは信心上どういうものなのかという質問に対して、答えられる人がいるでしょうか。私は、ほとんどの人が膨大な概念を整理することが出来ず断片的にしか答えられないと思います。私自身も道理を立てて教示して頂いたことがないのであります。

二十六世日寛上人が「観心本尊抄文段」(宗四ノ二二六頁)に

「文底深秘ノ大法本地難思ノ境智冥合久遠元初ノ自受用報身本有無作ノ事ノ一念三千ノ南無妙法蓮華經ヲ為シテ根本ト尊ニ敬ス之ヲ故ニ名ル本尊ト也」。

と示され、根本と為してこれを尊敬す、だから「本尊」というんだ、というのであります。それでは、この前段の意味は、何を含んでいるのか。老若男女、誰でも分に相応して分るのかというところ日蓮正宗の本尊はこれに決つ

ているんだから、信じていればいいんだ——。一言で云えばこうだという結論重視の考えで今日迄やって来たのであります。

私はこれではいけないと思います。信心する者達だけの自己満足でなく、何故、根本なのか、何故尊敬しなくてはいけないのか、何故本尊なのか、この本尊に何がこめられ、何を表わし、何を伝えようとしているのか、日蓮大聖人は御書の中で、どういうものだと言示されているのか、これらのことを伝えてこそ、一切の人々に妙法の縁を確かに結ぶことが出来るのだと思います。

たとえば、これと同じように、法華經に対する考え方があります。

法華經は一切の御經の中で最勝の經、最第一の經と表わされている。だから最勝、最第一の經だと理解している人がいます。しかしこれは、こう考えろという強制であり納得にはなりません。大切なのは、何故最勝なのか、何故最第一なのかということなのであります。信心とは金科玉条の様なものを強制されて有難がり、授けて頂いたと隷属するものではなく、納得した喜びを持って、何故こうなのかを、縁する人々に伝えられるものでなければ、ならないはずであります。

本尊にしても、「根本と為てこれを尊敬す、故に本尊と名くるなり」では、自身の納得ではないのであります。何故根本なのか？ 何故尊敬するのか？ 何故本尊なのか？ 本尊は私達の生命とはこうなんだという根本命題を説明し、伝えてくれているはずですから、私達自身のことが表示されてあるはずであります。ならば押し頂くのではなく、自分で自分の生命のことを確認し喜び、他人にも、おまえもこうなんだから、大切に信じた方が良いいよ、と伝えることが出来れば、これに過ぎることはないと思います。

今迄の時代、私達が教えられて来たことは、有難いから、有難がれ、どうこういうと眼がつぶれるというように、あげ奉って物知らず、上から押し着せられて、皆んなもそうしているから、そうだろう、他人に対しても、有難がれ有難がれでやって来ました。

それは、日蓮大聖人の仏法の本懐ではないと思います。拙い荒凡夫の理解力や心でも、本尊に向い、「私はこんなに尊かったんだ」と納得し、喜び、信じ、縁する人々にこの喜びを伝えることこそが、本当の本尊に表示された姿だ思うのであります。

これらのことから、本尊を自分自身のこととして考え

なければいけないと思い、この文章を書きはじめた次第であります。

二、何を表現しようとして本尊があるのか

「本尊問答抄」(全集三六五頁)に

「法華經の題目を以て本尊とすべし」

とあります。

(A) 本尊とは法華經の題目ということであります。又、「法師品」(開結三九一頁)の中には、

「經卷所住の処には皆応に七宝の塔を起てて極めて高広嚴飾なら令むべし、復舍利を安んずることを須いじ所以は何ん此の中には已に如來の全身有す」とあって

(B) 釈尊等の人格的存在を表現した仏像や、舍利を本尊とするのではなく。

(C) 釈尊、一切の諸仏並に森羅万象を存在させている、法を本尊とし、

(D) 法華經にあらわれる宝塔と重ねて理解しなければいけないことを右の經文は表わしているのであります。

涅槃經の第四如來性品「本尊問答抄」(全集三六五頁)には、

「復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に、如来恭敬供養す、法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり」と示し、

(E) ここには法と諸仏が一箇してはじめて、その法の意味、内容が明らかになることを示されているのであります。

このことは、「本尊抄送状」(全集二五五頁)に、もう一步踏み込んで

「仏滅後二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、困難を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歷るの輩は師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん」と示し、

(F) 師弟共に相寄ってこそ、靈山浄土に詣で三世十方の法華經を信じ修行し、成仏を遂げた一切の仏と相いまみえることが出来ることを示されているのであります。加えてここでは、

(G) この「本尊抄送状」の時点では、この「本尊抄」に示された内容の心というものは、まだ明らかとなつて居らず完結していないことを断言されているのであります。

す。

このことは、日蓮大聖人の生涯において、自らの発迹顯本は、竜の口の法難において成されているが、師弟共に靈山浄土に詣でると云う、真の師弟不二といえる本懐の状況には、今だ至ってなされていないということ、その状況が成されれば、刹那に成仏の境智を得ることが出来ることを予告示唆しているのであります。

日蓮大聖人は「周書異記」を根拠にして、釈尊の生涯を、周の昭王二年(BC一〇二九)四月八日生く周穆王五十二年(BC九四九)二月十五日没と、解釈し、計算しています。これを基準に計算すると、「観心本尊抄」を書かれた文永十年四月二十五日は、仏滅後二千二百二十二年目ということになります。

御本尊が、仏滅後二千二百三十余年と変化するのは、文永十二年からであり、身延への入山と、この入山にまつわる日蓮大聖人の仏法流布觀の変化が、二十余年から三十余年への変遷と考えられるのであります。しかし、この身延入山二年目の文永十二年は、仏滅後二千二百三十四年目でしかなく、三十年代には六年も足りないのであります。

佐渡から幕府へ上り、三度目の国諫をした時、幕府の

自らの権力、権利、権勢の安泰を心配はしても、心底、国を思い、衆生を思う気持はなく、国主としての徳なきことを知った日蓮大聖人は、今迄の幕府が、法華經の信仰を受持し、邪教を捨てたならば、一国の衆生は右へ倣えて広宣流布されると考えて来たものを、一人一人の衆生が、強制でも押し着せでもなく、納得と喜びを持って心の底から真実の妙法を信じてこそ成仏することが出来るのである。一切衆生の成仏こそが、広宣流布であるのだから、師弟双方に心の底からの妙法受持がなければ意味がない。そしてこのことは、妙法が真実であるならば必ずその師弟一箇の現証があらわれるということを予知し、文永十二年の、仏滅後二千二百三十余年に六年遠いにもかかわらず、将来に確心を持って、二千二百三十余年の表現に変えたと思えるのであります。

ちなみに、熱原法難のピークは弘安二年（一二七九）です。ですから、仏滅後二千二百二十八年目ということになり、これも、二千二百三十余年とは計算上言えないのであります。

では、「本尊抄送状」の

「未だ、此の書の心有らず」とは、この書の

「師弟共に」

の表現と、「本尊抄」以後の日蓮大聖人の事跡を考える時、これは明らかに、熱原法華講衆並に日蓮日興の師弟一箇の法華經本来の師弟観、成仏観、本尊観が、これによって明らかにされ、「此の書の心」となるのであります。

これらの「身延入山」「二千二百三十余年」に加えて、文永十二年六月期より、（富士年表上十九頁）

「日興の教化により駿河熱原滝泉寺寺家下野房日秀・越後房日弁・少輔房日禪・三河房頼円及び在家若干帰伏して弟子となる（熱原譜）」

○6月滝泉寺大衆の改宗により院主等謗徒の迫害起こる（熱原譜）」

等の不穏な事件が起り、これらのことから「此の書の心」が表われる予兆を日蓮大聖人は感じていたと思えるのであります。

私は、竜の口法難における発迹顕本は、日蓮大聖人のみの境涯であり、熱原法難こそが、師弟一箇の真の発迹であり、真の顕本であり、日蓮大聖人の出世の本懐、宗旨であると思うのであります。建長五年四月二十八日は宗旨の建立されたと云う日ではなく、南無妙法蓮華經の

教えが建てられたと云う日であつて、その時点には、法華經身読も、弟子の存在も本尊建立も、発迹顕本も、師弟一箇も皆無である為に、断じてこの日を「宗旨建立会」といつていつてはいけないのであります。そしてあまりにも当宗は、このたてわけを信心の上で大切にしていなかつたと思えるのであります。

（全集三六六頁）「本尊問答抄」には

「本尊とは勝れたるを用うべし」

と示されています。仏教に云う「勝」とは、勝れた法門、何が勝れているかといへば、「法華最勝」と云われる様に、法として最も勝れている法。一切衆生成仏の法ということであります。相手に勝利するという勝負の勝ではないのであります。勝劣の劣っている法とは一切衆生成仏の証しが無く、女性も成仏出来ないとか、悪人は成仏出来ないとか、条件、制約が規定づけられる教えを云うのであります。その意味から、

(H) 勝れたる法でなければ本尊と成り得ぬ。ということなのであります。次に、

(I) として、日蓮大聖人は、本尊は、自分の創作ではないとして、「本尊問答抄」（全集三六六頁）

「末代今の日蓮も仏と天台との如く法華經を以て本尊と

するなり、その故は、法華經は釈尊の父母、諸仏の眼目なり釈迦大日総じて十方の諸仏は法華經より出生し給へり故に今能生を以て本尊とするなり」

と示し、一切を生み出す能生こそが本尊であることを教示されている。又、「新尼御前御返事」（全集九〇六頁）には

「日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらんために此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師とをばしめされなん」

として、日蓮の創作や私有物ではない為に、仏法に照し不公平や私情を加える下附をしたならば、法華守護の諸天、十羅刹に、そのことを見とがめられると云われているのであります。又、加えて、本尊とは法であり「本尊問答抄」（全集三七三頁）

「此の本尊は世尊説きおかせ給いて後二千二百三十余年が間一間浮提の内にいまだひろめたる人候はず、漢土の天台、日本の伝教はばしめしていささかひろめ給はず。」

と示し、本来備っている法と、本尊を同義に示し、教機時国教伝流布の前後の条件を満してこそ表われるものであり、満さなければ、幽閉、死蔵となつて、一切衆生に

伝わらないことを示しているのであります。

(J) 一切を生み出す、能生の立場でなければ、本尊と拝することは出来ないとし、世間に流布する、真言の信心を破折して「本尊問答抄」(全集三二六頁)

「仏は所生、法華経は能生、仏は身なり、法華経は神なり、然れば則ち、木像画像の開眼供養は法華経にかざるべし而るに今木画の二像をもうけて大日仏眼の印と真言を以て開眼供養をなすは最も逆なり」

と示され、法華経から仏が生れ、仏は肉体であり、法華経は神である。と、「法前仏後」を示し、かつ、法華経によってのみ、これらは一箇することが出来ることを表わしているのであります。

(K) 本尊とすべき法も、南無妙法蓮華経の題目、開眼供養の法も南無妙法蓮華経でなければならぬ。日蓮大聖人の示された仏法は、

南無妙法蓮華経の法。

南無妙法蓮華経の本尊。

南無妙法蓮華経の題目。

南無妙法蓮華経の佛(成仏)。

と、ズレることなく一貫して南無妙法蓮華経であり、余経の混じる意味を持たない仏法なのであります。故に、

大日如来の本地も、阿弥陀如来の本地も、三世十方の一切諸仏の本地も、総て南無妙法蓮華経であるわけでありますから、大日如来を本尊として作り、大日経を以て開眼供養をしている世間の有様は本地南無妙法蓮華経を忘れ、南無妙法蓮華経に逆らうことになるわけであります。

さて、本尊の姿に関して「観心本尊抄」(全集二二九頁)には、

「木画二像に於ては外典、内典共に之を許して本尊と為す其の義に於ては天台一家より出でたり、草木の上の色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に恃み奉る」と無益なり」

と示します。この前の所には十如は有情。一念三千は有情非情にわたると示され、

(L) 南無妙法蓮華経の本尊とは、有情非情に渡る三千大千世界の生命全ての成仏の為に存在するものであるという意義付けがされるのであります。つまりこの世の中は人間だけで生きているのではないのですから、人間以外の生命の存在があつて、人間も自然の一部分として生かしてもらっている分けであります。「万物の霊長」等という形容は、人間の増上慢から出た言葉で、とんでも

ない間違ひなのであります。ですから人間以外の成仏まで説かなければ、人間の成仏はありえないのであります。この意味から、本尊を木や紙に示すのであります。

(M) 有情、非情にわたることのない本尊の表現であるならば、無意味（無益）であると示されているのであります。

そして、この南無妙法蓮華經の題目であり本尊は、「觀心本尊抄」（全集二四六頁）

「一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏木画二像の本尊は有名無実なり」

有情、非情、森羅万象の生命全てにわたる、

(N) 一念三千の仏種としての南無妙法蓮華經の題目でなければ、人間の成仏も、木や紙に表現した本尊も、姿はあっても中味の無いものであると示されているのであります。

一念三千の仏種は、元来、木や紙に表現することなど出来ないものを強いて（無理に）一つ的手段として、木や紙に表わしているのであります。しかし一方で、この木や紙に表わすこと事体が、有情非情の成仏（一念三千）を表現し我々に伝達していることである。———といふのであります。

こうして見て来ると、他宗の本尊が、どれほど木や画を媒体にして、釈迦や阿彌陀如来、大日如来、薬師、觀音、弥勒を本尊として造っても、その当体は十如（人間）だけを対照としたものであって、本尊の材質がどれほど非情の物体であっても、それらの本尊は有情非情にわたっていないということなのであります。ただ、木や紙を使用していれば良いというのではなく、本尊の主題、中心自体が有情非情にわたる平等大慧の「法」でなければいけないのであります。

本尊の年代、姿形にこだわらず、本物か偽物かということばかりを問題にする人々がありますが、もちろんそれも大切なことでありますが、本尊は姿形には表わし難い仏の心である法を強いて表わしているわけですから、本尊を拝することは、その心、法を拝する志がなければ意味がないのであります。その本尊に目通りすれば自分の願ひ事が最大にかなうという価値感、感覚では本尊の心を拝することは出来ないし、人に正しく伝えることも出来ないであります。本尊の真偽を問うならば同時に、自分達の信仰の真偽も問うべきなのであります。

南無妙法蓮華經の法を

南無妙法蓮華經の本尊と表わし

南無妙法蓮華經の志（魂、信心）を持って

南無妙法蓮華經の題目を唱え

南無妙法蓮華經の佛となる

一途無心に、自己中心の御利益信心でなく、「法」を中心にした、仏を信じ、「法」にかなった信心をしなければ有名無実なのであります。

又、この本尊の存在を明鏡に譬えて「観心本尊抄」(全集二四〇頁)に

「明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し設い諸經の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も、法華經並びに天台大師所述の摩訶止観等明鏡を見ざれば自分の十界百界千如一念三千を知らざるなり。」

本尊とは、我等の心を写す、明るい鏡である。明鏡をのぞいて、はじめて、我々は自分の顔がどういふものか知るのであります。

鏡に写っている自分の姿は、本当の自分ではありません。しかし、それを偽物として軽んずる人はいません。つまり、それを通して自分の体調や、心までものぞき見美しく、御化粧をすることも出来るのであります。

明鏡には仏となる自分の心性が写って、あなたも、仏も、有情非情の生命は、平等に、誰もが本来こうなっ

ているですよ。この、本当の自分の正体を信じて生きて行きなさいよ———ということなのであります。

(D) 衆生に自分の正体を知らせる為に本尊の存在があるのであります。

このことは、

○ 釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う「観心本尊抄」(全集二四六頁)

○ 妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髓に非ずや「観心本尊抄」(全集二四六頁)

○ 釈迦多宝十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を継紹して其の功徳を受得す「観心本尊抄」(全集二四七頁)

○ 我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所頭の三身にして無始の古仏なり「観心本尊抄」(全集二四七頁)

○ 上行無辺行浄行安立行は我等が己心の菩薩なり「観心本尊抄」(全集二四七頁)

右の御金言も、我々の己心の正体はこうなっているんだ、元来、仏と衆生は同じなんだということを伝えているのであります。

(D)に指摘しましたが、この本尊は、姿の上では、何を原形にしているのかといえ、

「其の本尊の爲体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏多宝仏釈尊の脇士上行等の四菩薩文殊弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を表する故なり」「観心本尊抄」(全集二四七頁)との法華經の場面であります。

この御金言の表現のスケールで分るように、わずか数十センチ、数メートル四方の御本尊様に、靈閣月卿(森羅万象)の体積を押し込めることは出来ないものであります。

しかし、数センチの明鏡に何千K平方、何万K平方の体積を持った天地自然を写し出す様に、寸法によって法の軽重が定まるのではなく、そこに一念三千(有情・非情)に渡る南無妙法蓮華經の心が示され、その心を信拝する志があるか否かが一番大切なのであります。

(1)の所でも示したように、

「是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間に
も但八品に限る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉、
阿難を脇士と爲し権大乘並に涅槃、法華經の迹門等の
釈尊は文殊普賢等を以て脇士と爲す此等の仏をば正像

に造り画けども未だ寿命の仏有さず、末法に來入して始めて此の仏像出現せしむ可きか。」「観心本尊抄」(全集二四八頁)

(P) 末法という時代を迎へることなく、表われることのない本尊。

このことの大きな理由として、

「所詮迹化他方の大菩薩等に我が内証の寿命品を以て授与すべからず末法の初は謗法の国にして惡機なる故に之を止めて地涌千界の大菩薩を召して寿命品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の衆生に授与せしめ給う」「観心本尊抄」(全集二四八頁)

「宝塔品の御時は多宝如來、釈迦如來、十方の諸仏、一切の菩薩あつまらせ給いぬ、此の宝塔品はいづれのところにも只今ましますらんとかがえ候へば、日女御前の御胸の間八葉の心蓮華の内におはしますと日蓮は見まいらせて候(中略)日女御前の御身の内心に宝塔品まします凡夫は見ずといへども釈迦、多宝、十方の諸仏は御らんあり」「日女御前御書」(全集一二四九頁)このように詳説し、

(Q) 末法に上行菩薩が現われ、本末有善の荒凡夫に対し、眞実の南無妙法蓮華經を授ける、それが本尊である